

# クザーヌスにおける 「non aliud (非他者)」<sup>1)</sup>の概念

山 下 一 道

## 序

ニコラウス・クザーヌスの初期の著作『De docta ignorantia (知ある無知について)』(1440)において「対立の一致 (coincidentia oppositorum)」の概念によって理解された「無限の一性 (Unitas infinita)」としての神の在り方は、後期の著作『非他者について (De non aliud)』(1462)において「非他者 (non aliud)」の概念のもとで展開される<sup>2)</sup>。「何ものもそれに対立することがないところの」<sup>3)</sup>ものとしての神の一性は、「非他者」の概念のもとで、対立の以前における自己限定を通じての自己同一性<sup>4)</sup>として成立し、同時に一切の他者との非対立のうちで各々の他者をその自己同一性において可能ならしめる自己限定作用 (definitio se ipsius)<sup>5)</sup>として解明されるのである。この小論において、我々は「非他者」の概念の論理的側面と存在論的側面を考察し、その単純性 (simplicitas) において一切を包含し<sup>6)</sup>同時に「一切の内の如何なるものでもないにも拘わらず、一切において一切である」<sup>7)</sup>という内<sup>・</sup>在<sup>・</sup>的<sup>・</sup>超<sup>・</sup>越<sup>・</sup>即<sup>・</sup>超<sup>・</sup>越<sup>・</sup>的<sup>・</sup>内<sup>・</sup>在<sup>・</sup>として<sup>・</sup>の<sup>・</sup>神<sup>・</sup>の<sup>・</sup>在<sup>・</sup>り<sup>・</sup>方<sup>・</sup>を<sup>・</sup>で<sup>・</sup>き<sup>・</sup>る<sup>・</sup>だ<sup>・</sup>け<sup>・</sup>明<sup>・</sup>ら<sup>・</sup>か<sup>・</sup>に<sup>・</sup>し<sup>・</sup>た<sup>・</sup>い<sup>・</sup>。

## I

1-1 定義 (definitio) を媒介にして成立する我々の知において、真理の探究は自己と他の一切を同時に限定する (definire) 定義を見いだすこととして遂行される<sup>8)</sup>。しかしながら、限定する働き (definiens) と限定されるもの (definiendum) という二つの契機から成り立つ定義において、限定する働きを更に限定するより根本的な限定する働きを見いだすという仕方では、一切を限定する働きとしての絶対の定義が探究される限り、我々はこの探究において一切を限定する働きそのものは最早なものによっても限定されることなく常に非限定のうちに留まり、この限定する働きそのもの

は同語反復的に「A est A」として表現されるにすぎないというアポリアに直面するのである。それ故、絶対の定義は一切を限定する働きをそれ自身の内から同語反復ではない仕方限定する定義として探究されねばならないのである。クザーヌスは、命題における「non aliud (ほかならないということ)」という契機に注目して「A est A」という同語反復的表現の代わりに「A est non aliud quam A」という命題を導入し、AはA以外の一のものとの関係のうちで自己を限定し、自己を周延する道を見いだしたのである。従って、この限定する働きとしての「ほかならないということ (non aliud)」が限定されるもの (definiendum) となることによって、すなわち、「non aliud est non aliud quam non aliud (非他者は非他者にほかならない)」と三一的に表現され、自己自身から自己を限定することにより、このアポリアを解決する道が見いだされるのである<sup>9)</sup>。そして、更に、この概念が「aliud non aliud quam aliud (他者は他者にほかならない)」として他の一切を限定することによって、我々は「非他者 (non aliud)」の概念において絶対の定義を見いだすのである。

1-2 「非他者」の概念が、一切の「他者」を限定し同時に自己を自己自身から限定することから、如何なる表示といえども常に「非他者」を前提にしその下で「他者」へと規定されるのであり、決して「非他者」それ自体に到達することが出来ないということが理解される<sup>10)</sup>。そして、「非他者」の概念は神そのものの名称ではないが、我々が互いに語の意味を介してのみ自分の見解を示すことが出来る限り、この「非他者」の概念の下で我々を直接に根源 (principium) へと導く超越の道が示され、名づけえない神の名称がより精密な仕方表現されることが明らかになるのである<sup>11)</sup>。

1-3 上述の定義において「他者」を「他者」として限定する「他者」の前提としての「非他者」の在り方は、その超越性の故に光の比喩を通じて探究される。「非他者」は、感覚で捉えられる光が感官を通して観ること (感性的な知覚) と可視的な色の、換言すれば、感覚を通して視られうるものの存在と認識の根源であり、この感覚で捉えられる光は更にそれ自身不可視な光にその存在を負っているという光のぼんやりした像 (lucis aenigma) を媒介にして、感覚的なものから叡知的なものへの上昇において映現する (recludere) 存在と認識の根源としての神の在り方へと我々を導くのである<sup>12)</sup>。

1-4 更に、「非他者」はそれ自身からのみ限定されるものとして、その接頭辞「非 (non)」の内に一切の「他者」としての在り方、一切の対立の内にあることの否定を

含み、如何なる肯定によっても否定によっても把握されることなく常に対立の以前 (ante) にあることを示している<sup>13)</sup>、それ故、我々の総ての把握を越えた神の超越性を表現するのに使われた接頭辞 “super”, “sine”, “in”, “ante” の持つ否定性の意味は「非他者」の「非」のうちに含まれており<sup>14)</sup>、更にこれまで超越者を表すのに使われた “unum”, “ens”, “verum”, “bonum” という名称も、例えば “unum” は “unum est non aliud quam unum” として常に「非他者」を前提し unum は non unum から区別され、それとの対立の中にあることが示されることによって、神の超越性を示すのに不十分であることが明らかになるのである<sup>15)</sup>。従って、「非他者」の概念によってのみ我々は、如何なる名称によっても把握されえない神の無限の超越性に否定的な仕方で漸近することが出来るのである。

1-5 それでは、「非他者」の概念のもとで如何なる超越的名称をも相対化し、我々の知にとってどこまでも把握され得ない場を開示することによる超越とはどのようなものであろうか、このことは「non aliud est non aliud quam non aliud」として自己を自己自身から限定する「非他者」の概念の意味内容を明らかにすることにほかならないのである。既に考察したように、我々の知が常に或る名称を媒介にしてそれが示す何か或るものに関わることによって成立する限り、例えば、「一」という名称で示されたものは「一」以外の他の一切としての「多」との関係のうちで理解されるように、或る名称の措定は同時にその名称によって措定されたもの以外の一切の他のものの措定を含んでいるのである<sup>16)</sup>。このことは、「……ではない」という否定的言明によって或るものを示す場合も、この否定的言明によって示されるものは否定される当のものからそれとの関連で規定される限り、肯定言明の場合と同様につねに対立のうちにあるのである。それ故、名称を越えたものを名称のうちで把握しようとするならば、それは知がこの対立の内での限定として成り立つという大前提、すなわち、あるものは同時に肯定され否定されることは出来ないという矛盾律の根本原則を何らかの仕方で越える知の有り方として生起しなければならないのである。クザーヌスが「私がそれ故に神を天でもなくそして天から他なるものでもないものとして、一般に他者でもなく他者から他なるものでもないものとして観るならば、私は私が観るところのものをいわば認識しつつ観るということはないのである」<sup>17)</sup>と述べるように、それは一切の名称による述語づけを同時に否定すること、すなわち、Aの否定と同時にAでないこと(A以外のもの)であることの否定、対立項の同時否定を通じて最早名称

によって限定されない場の開示として遂行されるのである。従って、このような知の在り方は、更に、知の対象面と作用面との対立の同時否定において、換言すれば、神は一切の名称が意味するところのものとしては理解され得ないという対象面についての理解 (=非他者の認識 *cognitio non aliud*) と何か 或るものによって表示されないものはなにものも知解され得ないという知る主体の側における理解 (完全な無知 *perfecta ignorantia*) との同時的相即における、知性を越え (*supra intellectum*) 他者を越えその以前 (*supra et ante aliud*) への超越として生起するのである<sup>18)</sup>。

1-6 知によって把握され得ない場としての他者の以前、対立の以前においては、対立を越えたものは最早対立のうちにあるものとの対立において見られるのではなく、不可視なものも可視的なものにおいて可視的なものと異なったものではないものとして見られるように、どこまでも対立のうちにあるものとの非対立のうちで見られねばならないのである。すなわち、そこでは「非他者」は「他者」が名づけられうるものであれ名づけられえないものであれ「他者」に対して他なるものではないのである<sup>19)</sup>。この事態をクザーヌスはかれのアリストテレス批判において次のように展開している。どの肯定言明も否定言明に矛盾し、そして、或るものについて同時に矛盾する言明をなすことが出来ないということを最も確実なこととするアリストテレスの立場においては、肉眼を以て視覚の対象のうち可視的なものの実体を認識しようとし、可視的なものの探究と発見の可能性を最初に付与する光を先ず把握することに気づいていない人のように<sup>20)</sup>、矛盾律を根本原理とする悟性 (*ratio*) は、自己にとって認識不可能なものへの道を開くことは出来ないと批判するクザーヌスは、更に、それにも拘わらず、もし矛盾するものにおいて矛盾律がその前提として見いだされ、かつ、この矛盾律それ自身は矛盾しないもの (矛盾なき矛盾) として考察されるならば、ディオニシウスが神を対立なき諸対立の対立 (*oppositio oppositorum sine oppositione*) と見なしたように、矛盾するものの以前に、(この矛盾するもの前提としての) 矛盾律の以前に、この矛盾律はそれ自身に矛盾しないという事実が見られると主張し、従って、対立する諸事物以前の対立には如何なるものも対立しないというのである<sup>21)</sup>。

以上のように、「非他者」の概念の下で他者の以前、対立の以前への超越において「非他者」は「他者」と対立なきもの、「他者」における「他者」の以前として開示される限り、「他者」から「非他者」への内在的超越は同時に「非他者」から「他者」への超越的内在として理解される。それ故、我々は次に「他者」の根源としての「非

他者」の在り方をその存在論的次元において解明し、「他者」の在り方を「非他者」の内から考察しなければならない。

## II

2-1 さて、「非他者」は、如何なる在り方においても「他者」とはならないことをその本質とし、従って「他者」に対して他なるものでもなく、「他者」において（それとは異なる）他なるものでもなく、又、それには何も欠如することなく、その外では如何なるものも存在しえないものとして存在しているのである<sup>22)</sup>。そして、「non aliud est non aliud quam non aliud」として、他の如何なるものをも前提することなく自己を三一的な仕方限定する「非他者」の定義において、父、子、聖霊として、また、一性、相等性、両者の結合として表現された神の三一的な在り方が、最も直接的に表されているのみならず、更に「非他者」の存在の仕方が、「非他者」から「非他者」を生じ、この生じた「非他者」と「非他者」とから「非他者」において、「非他者」が「非他者」として自己を限定することのうちに終了する三一的な自己限定の運動における自己同一性であることが示されているのである<sup>23)</sup>。すなわち、それは最早実体的な一として在るのではなく、自己限定の運動を通して成立する実在的に無限な力 (virtus actu infinita)<sup>24)</sup>として存在しているのである。

2-2 このように「他者」の根源が、三一的自己限定の運動における自己同一性として見いだされる限り、「他者」の在り方は第一にそしてどこまでもこの「非他者」の在り方から考察されなければならない。クザーヌスが「aliud est non aliud quam aliud」という定義を、「非他者」として表示された根源が「他者」を限定すること、すなわち、「非他者」は天は天であり他のなにものでもないという「他者」の自己同一性の根拠であり、この根拠を通じて天が構成され、感覚で把握される天は「他者」に対して他ではない「非他者」によって「それがあるところのもの (quod est)」となることから、「非他者」は天においては天であると述べるように<sup>25)</sup>、「他者」は「非他者」自身からその自己同一性を通じて「他者」として創造されるのである。

2-3 しかしながら、「他者」の存在根拠としての「非他者」はどこまでも対立の以前として多重化されることなく、決してそれ自身が「他者」となることはないが故に、「非他者」の「他者」における在り方としてその「他者の」成立には、クザーヌスが「他者は何か或る他のものに対して他であるので、他者には、それに対して自己が他

者であるところのものが欠けている」<sup>26)</sup>と規定し、「天は天でないものに対して他であるので、天は他者である」<sup>27)</sup>と述べるように、更に自己以外の他のものとの関係のうちで「他者」として存在するということが属するのである。このような「他者」の在り方についてクザーヌスは、「何性 (quidditas)」についての考察において、「それ故、神あるいは非他者の何性はなにか他のものの何性に対して他であるのではなく、一切の他の何性において（それとは別の）他の何性ではないのである。他者は（自己以外の）他のものが無ければ非他者であるので、従って、他者の何性に対して他の諸々の何性がこの他者に偶然的に帰属するのである。他者の何性に応じてそれ自らが持つこれらの他の諸々の何性は非他者の何性の反映であり、それらは無の陰の内へと沈んで行くのである。非他者の何性は他者の何性の何性であり、この他者の何性は確かに最初の何性の映現である。他者の何性に偶然的に帰属する他の諸々の何性が存在し、これらの内に、これらの何性が偶然的に帰属するあの（非他者の）何性が映現しているのである」<sup>28)</sup>と述べるように、「非他者」が「他者」においてその自己同一性の根拠として存在するということが、各々の「他者」が自己以外の「他者」から相異していることの根拠であり<sup>29)</sup>、それ故、相異性のうちでの「他者」相互の在り方は「非他者」の「他者」における「映現 (relucentia)」として理解されるのである。換言すれば、「非他者 (一)」と「他者 (多)」の関係としての「非他者の何性の一と類的何性の多」、「類的何性の一と種的何性の多」、「種的何性の一と個物の多」の関係のうちで、「非他者」は類的何性においてその類的何性の、類的何性を媒介にして種的何性においてその種的何性の、更に種的何性を媒介にして個物においてその個物の自己同一性の根拠として、いわば垂直的な仕方で一切の「他者」のうち存在することにより、同時に類的何性の多のうち、類的何性を媒介にして種的何性の多のうち、更に種的何性を媒介にして個物の多のうちいわば水平的な在り方でそれぞれ異なった仕方映現するのである。従って、「非他者」と「他者」の関係は、「非他者」は個物の多のうち映現するが、他方、個物の多はけっして「非他者」の構成要素ではなくどこまでもその反映であり「非他者」を限定するものではないという不可逆的な関係として、「一切の内の如何なるものでもないにも拘わらず、神は一切において一切である」<sup>30)</sup>と表現されるのである。

2-4 上述の如く、事物の一切の本質 (essentia) は「非他者」の本質としてのみ存在する<sup>31)</sup>こと。換言すれば、「非他者」は諸々の本質における本質 (essentia in essen-

tiis), 又は, 諸々の本質の本質 (essentia essentiarum) として諸々の本質の内に存在し, この諸々の本質が個物の多のうちに映現する限り, 更にこの諸々の本質の個物の多における映現という個物化の原理が解明されねばならない. クザーヌスは, 真夜中の真っ暗闇の場所でルビーと呼ばれる赤ざくろ石において蠟燭を必要とすることなしに輝く光の在り方から実体と属性の関係を考察する<sup>32)</sup>. すなわち, 光自体は感官にとって可視的なものとはならないが, この赤ざくろ石という宝石において輝く光は, この石によって可視的となるものを目の中の光のうちへと齎すのである<sup>33)</sup>. それ故, この輝きの強度こそルビーをルビーたらしめる本質であり<sup>34)</sup>, ルビーの実体は物体の大きさや小ささという量的規定の以前に, 視覚, 触覚, 表象能力等が把握する色や形態といったルビーに偶有的に属する諸性質の以前に見いだされねばならないのである<sup>35)</sup>. 他方, 実体的な光がその限定としてのルビーの色という光の像または影として, なにか外的なものあるいは感覚で把えられるものという類似性のうちに現れるように<sup>36)</sup>, その本質はこのような偶有的な諸性質のうちに, 感覚的に知覚されるために輝き出るのである<sup>37)</sup>. 従って, 感覚的に知覚されるものとなるのが諸々の本質が個物の多のうちに映現することの制約であり, そのためには存在の可能性 (possibilitas essendi) としての質料 (materia) が必要とされるのである<sup>38)</sup>. 「非他者」は質料的限定を伴うことによって個物をその自己同一性において成立せしめつつ相互に異なる多のうちに映現するのである.

2-5 「非他者」自身からその自己同一性を通じて, 「他者」が質料的限定のうちで相互に異なる自己同一性として成立するという上述の考察から, 我々は「非他者」と「他者」の, 神と被造物の関係を次のような自己同一性の区別と関係として理解することが出来ると思われる. すなわち, 「他者」がその自己同一性において成立することは, 知ることが知られるものに対して他者でなく, 感覚としての見る働きは見られるものに対して他者ではないように<sup>39)</sup>, 各々の「他者」は自己以外の他のものとの関係のうちでその自己同一性を保持する三一的自己同一性として存在するということであり, 更に, 「他者」の自己同一性は, 知解すること (intelligere) が知解しうるものを自覚的に自己自身と他ではないものたらしめるように努める<sup>40)</sup> 如く, 自己同一化の運動のうちで成立する動的な同一性であること, そして, このことは, 決して「他者」とはならない「非他者」の自己同一性が, 「他者」が自己を可能性から可能性の完成としての現実性へと自己を限定するようへと導く動者 (motor) として各々の「他者」

の根底に超越的に内在することから生起する<sup>41)</sup>こととして理解されるのである。三一的な神である目は、自己自身を見るのと同じ一瞥で同時に一切を見るのであり、この神の見ることは限定であり、創造である<sup>42)</sup>とクザーヌスが述べるように、一切の根源としての「非他者」の自己同一性は絶対的な三一的自己限定の運動のうちで成立する「実在的に無限な力」としてどこまでもその同一性のうちにとどまり、そして、まさにそのゆえに、各々の「他者」において、それらが自己以外のものとの間で自己自身となるべく努めている自己同一化の運動のうちそれぞれ異なった在り方で映現しているのである。

### 註

- 1) テキストは、*Nikolaus von Kues Philosophisch-theologische Schriften* Bd. I. II. herg. von Leo Gabriel, Herder, Wien. 1964, 1966. (以下, W. S. I. II. と略記する) を使用し, *Nikolaus von Kues vom Nichtanderen* Übersetzt und Einführung und Anmerkungen herg. von P. Wilpert 2 Aufl. Hamburg 1976 の独語訳とその註を参考にした。その他, 二次文献としては, E.A. Wyller, "Zum Begriff "non aliud" bei Cusanus", in: *Nicolo Cusano agli indizi del mondo moderno*, Firenze 1970, S. 419-443. *Id.* "Nicolaus Cusanus >De non aliud< und Platons Dialog >Parmenides<. Ein Beitrag zur Beleuchtung des Renaissance-platonismus", in: *Studia Platonica*. Festschr. f. H. Gundert. Amsterdam 1974. S. 229-251. W. Beierwaltes. "Deus oppositio oppositorum", in: *Salzburger Jahrb. f. Philosophie* 8 (1964), S. 175-185. *Id.* *Identität und Differenz*. Klostermann, Frankfurt, 1980. を主に参考にした。
- 2) *De non aliud* IV (W. S. II. S. 456), N: "...; et istud est, quod per oppositorum coincidentiam annis multis quaesivi, ut libelli multi, quos de hac speculatione conscripsi, ostendunt".
- 3) *De docta ignorantia* I. 2. 4. 6. 24 (W. S. I. S. 198, 206, 212, 278, 282), : "..., cui nihil opponitur, ..."
- 4) *De non aliud* V (W. S. II. S. 464), N: "..., in eo definitivo motu de non-alio non-aliud oritur atque de non-alio et non alio-exorto in non-alio concluditur definitio, ..."
- 5) Vgl. *Nikolaus von Kues vom Nichtanderen* Übersetzt und Einführung und Anmerkungen herg. von P. Wilpert. 2Aufl. Hamburg 1976. S. XV.
- 6) Vgl. *De docta ignorantia* I. 4. (W. S. I. S. 206), : "... in sua simplicitate absoluta omnia complectantur." *Ibid.* I. 24. (W. S. I. 280): "..., ubi omnia



absque compositione sunt in simplicitate unitatis complicata, ...”

- 7) *De non aliud* VI (W. S. II. S. 466), N: “... in omnibus omnia, licet omnium nihil.”
- 8) Vgl. *De non aliud* I. (W. S. II. S. 446-448)
- 9) Vgl. E. A. Wyller. *Nikolaus Cusanus' >De non aliud< und Platons Dialog >Parmenides<*, Amsterdam 1974, S. 244-247.
- 10) Vgl. *De non aliud* II. (W. S. II. S. 450), “N: ..., Nam omne significatum, quod ... F: ... Aliud enim cum sit...;”
- 11) Vgl. *Ibid.*, “N: ... Cum nos autem alter alteri ... ... N: ... Ex his igitur nunc plane vides ....”
- 12) Vgl. *De non aliud* III (W. S. II. S. 452), “N: Dicunt theologi Deum nobis in lucis aenigmate clarius relucere, quia ....”
- 13) Vgl. *De non aliud* IV (W. S. II. S. 456), “F: Visne dicere non-aliud affirmationem esse vel negationem vel eius generis tale? N: Nequaquam, sed ante omnia talia;” “Non aliud” の “non” については, E. A. Wyller, : *Zum Begriff “non aliud” bei Cusanus*, Firenze 1970, S. 424-429.
- 14) Vgl. *Ibid.* (W. S. II. S. 454-456), “N: ..., Omnes enim theologi Deum viderunt quid maius esse quam concipi posset, et idcirco supersubstantiam, supra omne nomen et consimilia de ipso affirmarunt, neque aliud per super, aliud per sine, aliud per in, aliud per non et per ante nobis in Deo expresserunt; ....”
- 15) Vgl. *Ibid.* (W. S. II. S. 458), “nihilominus tamen unum, cum nihil aliud quam unum sit, aliud est ab ipso non-aliud ...”
- 16) Vgl. *De docta ignorantia* I. 24. (W. S. I. S. 282), : “Est itaque ex hoc manifestum nomina affirmativa, quae ....”
- 17) *De non aliud* XXII (W. S. II. S. 546), “N: Unde quando ipsum nec caelum, nec a caelo aliud esse video et universaliter nec esse aliud, nec ab alio aliud esse, non video ipsum quasi sciens, quid videam.”
- 18) Vgl. *De non aliud* XVII (W. S. II. S. 524), “N: ... Unde si non potest intelligi esse id, quod ....”
- 19) *De non aliud* XXII (W. S. II. S. 542), “A: ... non-aliud ipsum ab alio aliud esse non posse quocumque nominabili aut innominabili, ....”
- 20) *De non aliud* XVIII (W. S. II. S. 528). “F: Quia qui quaerit videre, quaenam visibilium et substantia, ....”
- 21) Vgl. *De non aliud* XIX (W. S. II. S. 532), “N: ... At si quispiam eum interrogasset, nunquid in contradicentibus ....”

- 22) Vgl. *De non aliud* VI (W. S. II. S. 464), “N: Non-aliud neque est aliud, nec ab alio aliud, nec ….”
- 23) Vgl. 本稿註 4.
- 24) *De non aliud* VII (W. S. II. S. 470)
- 25) Vgl. *De non aliud* XXI (W. S. II. S. 538-540), “P: …, qua mens quidem videt principium omnium ….” *Ibid.* VI (W. S. II. S. 466), “N: …; tunc enim ratio, cur caelum caelum et non aliud, ….”
- 26) *De non aliud* VI (W. S. II. S. 464), “N: …; Aliud enim, quia aliud est ab aliquo, eo caret, a quo aliud.”
- 27) *Ibid.* (W. S. II. S. 466), “N: … Caelum autem cum an non-caelo aliud sit, idcirco aliud est; …”
- 28) *De non aliud* VIII (W. S. II. S. 472), “N: …; ideo Dei sive ipsius non-aliud quidditas ab aliqua quidditate non est alia, sed in omni alia quidditate ipsum non-aliud est ipsa non alia. ….”
- 29) Vgl. W. Beierwaltes, *Ibid.*, S. 114-120., P. Wilpert, *Ibid.*, S. 145-152. Anmerkungen zu Kapitel 6.
- 30) Vgl. 本稿註 7.
- 31) *De non aliud* X (W. S. II. S. 482), “N: … Omnes igitur rerum essentiae nisi ipsius non-aliud non sunt.”
- 32) *De non aliud* XI (W. S. II. 486), “N: … Videsne hunc lapillum carbunculum, quem …?”
- 33) *Ibid.*, : “Non enim occurreret sensui ideoque nequaquam sentiretur, cum ….”
- 34) *Ibid.*, “…; fulgoris igitur intensitatem eius pretiositatis mensuram perspicio non autem corporis molem, ….”
- 35) *Ibid.*, “Ante magnum igitur corpus et parvum carbunculi substantiam cerno. ….”
- 36) *Ibid.*, “Carbunculi autem hoc est rubini color, rubens scilicet, non nisi lucis terminus est substantialis, ….”
- 37) *Ibid.*, “Unde omnia, quae visu, tactu, imaginatione de carbunculo attingo, carbunculi non sunt essentia, sed ….”
- 38) *De non aliud* XII (W. S. II. S. 490), N: “… , ut sensibilis fiat substantia, materiam requirit substantificabilem ….”
- 39) *De non aliud* Propositiones XIX (W. S. II. 562), : “…Ipsum igitur non-aliud clarius relucet in intellectu, qui ….”
- 40) *Ibid.*, “Hoc est enim intelligere, scilicet intelligibilia a se non alia facere, …”

- 41) Vgl. *De non aliud* Propositiones XX (W. S. II. S. 564), : “... Potentia autem non quiescit, nisi sit actu, ...”
- 42) Vgl. *De non aliud* XXIII (W. S. II. S. 548), “A: ... Visus ergo, qui et theos unitrinus, non alia sane visione sese et alia alia videt, sed ea visione, qua se, simul et omnia intuetur. Hoc videre definire est. ...”